

現代美術の保存修復／再制作の事例研究

一 國府理《水中エンジン》再制作プロジェクトのアーカイブ化

2018年度活動報告

國府理（1970～2014，京都市立芸術大学 美術研究科 彫刻専攻修了）は、自作した空想の乗り物やクルマを素材に用いた立体作品などを通して、自然とテクノロジー、生態系とエネルギーの循環といった問題を提起してきた。福島第一原発事故への批評的応答として発表した《水中エンジン》（2012）は、軽トラックのエンジンを水槽に沈め、水中で稼働させる作品である。部品の劣化や漏電、浸水などのトラブルに見舞われた國府は、展示期間中、メンテナンスを施しながら稼働を試み続けた。

國府の急逝後、使用されたエンジンも廃棄されていたため、《水中エンジン》の展示はほぼ不可能となっていた。だが、キュレーターの遠藤水城氏が企画した再制作プロジェクトにより、2017年に2台の再制作が行われた。國府は設計図や稼働マニュアルを残していなかったため、記録写真や映像の調査、関係者へのインタビューなどを参照し、試行錯誤の連続の作業だった。

この再制作プロジェクトの意義は、極めて多岐に渡る。1) 作家／設計図／モノの不在といった何重もの困難を抱えた状況下での再制作であること。2) 資料やインタビューの収集によるアーカイブの構築。3) 安全性を最優先に考慮した再制作2台とオリジナルとの「差異」の比較検討から、オリジナルの本質が逆照射されること。4) 動的な作品における「同一性」の問題（物理的同一性／コンセプトのどちらのレベルに重きを置くのか）、「再制作」と言いうる根拠や倫理性、パーツを交換しながら新陳代謝的に生き延びる作品の「保存」のあり方など、「再制作」「保存修復」をめぐる広範な問いの喚起。

現代美術、特にメディア・アート作品や、非永続的な素材を使用した作品、一過性のインスタレーションやパフォーマンス作品をどう保存すべき／できないのかは、国内外の美術館における火急の課題である。本プロジェクトでは現在、再制作の記録、関連トークやシンポジウムの採録、再制作プロジェクトメンバーによる論考などをまとめた書籍の出版に向けて準備を進めている。

高嶋 慈（芸術資源研究センター非常勤研究員）